NUAL

名古屋大学全学同窓会
NAGOYA UNIVERSITY ALUMNI ASSOCIATION
Newsletter
No.8 平成19(2007)年3月

NUAL（ニューアル）はNagoya University Alumni Associationの略称です。

Contents

第2回ホームカミングデイ
NU Second Home Coming Day 1
同窓会ニュース 3
NUAL News
大学ニュース 13
Nagoya University News
事務局からのお知らせ 16
From the NUAL Office

（左上）野依記念学術交流館のテーマ展示
（中央）交流サロンで演奏するフォルクローレ同好会（右上）模擬法廷の見学
（左下）運動部同窓生と現役学生の交流会（右下）H-ⅡAロケットの模型

第2回ホームカミングデイ
NU Second Home Coming Day

The 2nd Nagoya University Home Coming Day 2006 was jointly held on September 30th, 2006, at the Toyoda Auditorium and the whole over the Higashiyama Campus with about 4000 participants including former students and current students' families.

第2回名古屋大学ホームカミングデイが、平成18年（2006年）9月30日（土）、東山キャンパスにおいて、名古屋大学との共催で開催されました。

今年は、行事当日が教職員の出勤日とされ、全学挙げて取り組まれました。当日は、秋晴れの爽やかな天気だったこともあり、同窓生や学生の家族を中心に、約4000名もの参加がありました。

昨年に引き続き、今年で2回目となるこの行事は、名古屋大学と名古屋大学全学同窓会が共催し、卒業・修了生、学生、現旧教職員等の本学関係者、学生のご家族、地域の方々との交流を通し名大の教育・研究の活動やすぐれた成果を紹介し名大の活動を理解してもらうことを目的としています。

今回は、メインテーマに「宇宙から地球へ」と題して開催しました。開会式に引き続き、テーマ講演が行われ、宇宙航

空開発機構（JAXA）からお招きした星出彰彦宇宙飛行士、前村孝志三菱重工業株式会社名古屋航空宇宙システム製作所技師長、上出洋介太陽地球環境研究所教授、髙橋亨文学研究科教授の4名の講演者がそれぞれ異なった立場から「宇宙から地球へ」について語られました。スケジュールの都合で、講演時間が短くなってしまいましたが、講演会終了後、「星出宇宙飛行士を囲んで」と題し、参加者と星出宇宙飛行士との質疑応答の場が設けられ、普段接する機会のない宇宙飛行士を前に、大人も子どもも、活発に質問していました。野依記念学術交流館では、テーマ展示が行われ、本学が大きな貢献を果たしてきた学問分野の一つである宇宙、地球に関する研究活動をパネル展示等によって紹介しました。

今回、全学同窓会総会は開催しませんでしたが、開会式で、伊藤義人全学同窓会代表幹事（附属図書館長）が本会活動報告を行いました。ホームカミングデイに先立ち、9月29日には、今回お招きした全学同窓会タイ国支部役員Pramote Sirirote氏、中国上海支部長　唐駿氏およびバングラデシュ支部長　Md. Islam Khan氏を歓迎するレセプションを行いました。ホームカミングデイでは、今年も、各部局同窓会の行事が活発に行われました。

野依記念学術交流館では、元山岳部所属の清水哲太トヨタホーム代表取締役会長、元陸上部所属の松本正之JR東海代表取締役社長、元テニス部所属の齋藤英彦氏名古屋セントラル病院長の3氏をパネリストに迎えて、運動部交流会と題した、運動部同窓会と現役学生との交流会が行われ、現役体育会学生にエールを送っていました。

文学部同窓会・教育学部同窓会・理学部同窓会では同窓会総会や昼食会談話会が催されました。法学部同窓会では、法学部・法学研究科、CALE（法政国際教育協力研究センター）と協力して、柴田昌治法学部同窓会理事長（日本ガイシ（株）代表取締役会長）の「日本とアジア―大学の国際競争力―」と題する講演会が行われました。昼からは留学生センターのラウンジにて留学生が腕をふるった各国の郷土料理を味わう昼食会を実施しました。工学部・工学研究科同窓会も、「名大の工学研究、いま、そして、みらい」と題して、講師にマイクロ・ナノシステム工学専攻の三矢保永教授とマテリアル理工学専攻材料工学分野の浅井滋生教授にお願いし、講演会を開催しました。それぞれ総括責任者をされている21世紀COEプログラムのそれぞれの研究グループにおける最新の研究成果が紹介されました。

豊田講堂前庭では、大学院生命農学研究科附属農場による生産物、宇宙関連グッズ及び名大グッズが販売されました。特に、宇宙関連グッズの中でも、乾燥したアイスクリームなどの宇宙食が人気を博し、ブースは、いつもたくさんの人で賑わっていました。

また、同前庭で、15時から、交流サロンを開催し、総長や教職員と来場者との交流の場として賑わいました。

今年は、名古屋ドーム約14個分の広さを持つ東山キャンパス内の建物間を移動する手段として、無料シャトルバスを約10分おきに運行し、年配の来場者の足となって活躍しました。

また、生協の各食堂や、複数箇所に設けたお弁当売り場での、名古屋の名物定食、弁当の販売、また、キャンパス内の至る所に、無料飲料水サービスを設置するなど、来場者が快適に過ごせるような、工夫が随所に見られました。

今回の反省を生かし、今年も秋にホームカミングデイを実施することが検討されています。日にちが決まりましたら、全学同窓会のホームページでお知らせしますので、皆様のご参加を心よりお願い申し上げます。

昨年の報告は下記のホームページに掲載されています。

http://www.nagoya-u.ac.jp/home-coming-day/hcd_2/index.html

テーマ講演会場

星出さんを囲む会で質問する参加者

同窓会ニュース　NUAL News

名古屋大学全学同窓会から同窓会カード発行のお知らせ

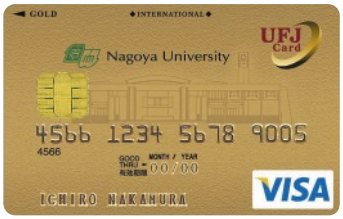
全学同窓会は、同窓生と母校のつながりの場として、また大学の社会貢献活動の基盤として、さまざまな事業を展開しています。たとえば、平成16年度から毎年2回行なっている同窓会による大学支援事業の公募では、これまでに学生の課外活動、就職支援事業、本部・部局による各種行事、寄付講義など、名古屋大学の多様な諸活動に財政面から貢献しています。しかし、限られた予算の中から事業の採否を選考しているために、採用したくても見送らざるを得ないという残念なケースもありました。大学支援をさらに広げるためには、どうしても同窓会財政基盤の一層の強化が必要です。

そこでこのたび、新たな同窓会事業の一つとして「名古屋大学カード」という名称のクレジットカードを発行することにしました。このカードは、UFJ ニコスのゴールドカードと同等の機能*を持ち、年会費は永年無料です。是非、同窓会員の皆様にお持ち頂くことをお勧めします。同窓生が「名古屋大学カード」を利用されますと、その金額の一部が手数料として全学同窓会に還元されます。全学同窓会では、これを名古屋大学の活動支援に充て、母校の充実に役立ててもらいます。皆様のごく日常のショッピングが、母校の恩師や後輩への経済的支援に結びつくのです。

イメージ図にありますように、カードには名古屋大学の象徴である豊田講堂の線描をデザインしました。この線描は実際の豊田行動の設計図面から起こしたもので、同窓生のアイデンティティーの証として相応しい風格を備えています。

（カード名称や学章（NU マーク）、豊田講堂のデザイン使用については、名古屋大学より使用の許可を受けています。）

全学同窓会では今後、強力な同窓生のネットワークを活用して、「名古屋大学カード」に通常のカード会社の特典に加え名古屋大学ならではの特典を増やして行きます。どうか、同窓会の活動理念とカード発行の主旨をご理解いただき、一人でも多くの皆さんにご利用いただきますよう、ご協力をお願い申し上げます。



＊UFJ ゴールドカードとは一部異なる特典がございます。詳細は入会申込書をご確認下さい。

■同窓会カードの申込用紙請求先

名古屋大学全学同窓会事務局

TEL/FAX : 052-783-1920

E-mail : nual-jimu@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

申し込みはインターネットでも可能です。**全学同窓会ホームページ**（http://www.nual.nagoya-u.ac.jp/）から、お申し込みください。

大教室で開講した全学同窓会寄附講義「キャリア形成論」

平成18年度の「キャリア形成論」はさる1月29日に修了、前・後期合わせて約300名の学生が受講しました。歴史を振り返れば、平成16年度に教育学部が全学同窓会の寄付講義として開講した「社会人との対話によるキャリア形成論」が始まりです。平成17年度からは2年生以上を対象とした全学教養科目として前期100名、後期80名の受講枠で開講したが、定員を大幅に超えたため教養教育院の特別のはからいで最大200名まで受講が可能となったものです。この講義が人気授業の一つとなったのも、弁護士、公認会計士、新聞記者、映画監督、会社役員や行政マンなど各界を代表する名大OB・OG が講師となって自らが歩んでこられたキャリア形成を対話形式で講義され、また所属している産業の動向を説明されるので学生にとって新鮮に映るからと考えられます。

わが国は早期離職等による若年労働者の雇用問題に苦慮しているが、名大においてもニート・フリーター予備軍が皆無でないわけではありません。そうしたことも配慮して、目下キャリア教育の推進に力を入れており、本講義は、1年生対象の「大学でどう学ぶか」とならんでキャリア教育の柱となるものです。平成19年度は全学同窓会から3年間の連続支援を受けて開講する2年度目で、元局長経験者、著名アナウンサーも講師陣に加え、一層充実を図る所存です。

（田中宣秀）

講義中の筆者

産学官連携推進本部との共催講演会

全学同窓会と産学官連携推進本部は、1月17日（水）、環境総合館レクチャーホールにおいて、本学卒業生の依田直也氏を講師に迎え、「産学連携とイノベーションの課題：イノベーションはどう動くか　公共空間（Public Space）の提言」と題する講演会を開催しました。

全学同窓会は、設立以来、大学と社会を結ぶ必須の組織を目指して活動しており、今回の講演会も全学同窓会関東支部を中心に提案され産学連携を視野に入れて、産学官連携推進本部との共催により開催したもので、平成16年1月に引き続き2回目となるものです。当日は平野総長をはじめ、本学の卒業生、教職員および学生等70名を超える参加がありました。特に今回は、講師の依田氏からの要請もあり、大学院生を中心に学生の参加が目立ちました。

依田氏は、昭和29年に本学工学部応用化学科を卒業し、フルブライト奨学生として Harvard 大学化学科で研究された後、東レ株式会社に入社、その後、株式会社東レ経営研究所代表取締役社長を務められ、現在は、立正大学大学院経営学研究科教授として活躍されています。講演会は、「イノベーションとグロバリゼーション」をキーワードに、依田氏自身の研究が20年後に再評価され共同研究から実用化された経験を踏まえ、イノベーションは研究者の直感力と構想力により突然起こるので、産学連携によるイノベーションのためには、大学を公共空間（Public Space）として整備していく必要があり、特に拘束されない自由な環境の整備が必須であると強調されました。大学には独創性豊かな若い人材の育成を期待したいと語られました。

質疑では、産学連携や研究担当の名古屋大学理事から「最近、大学の研究資金には大規模な競争的外部資金獲得が叫ばれているが、目的志向型の研究ではイノベーションできないのではないか」との疑問が出されました。依田氏は、日本社会、特に文部科学省の体制では真のイノベーションを生み出すのは困難であるとし、「小さく産んで大きく育てる」、小さな成果を積み上げて評価を得ながら大きな変革へとつなげていくしかないのではないかと答えられ、そのためにも、名古屋大学のような立場の大学の一層の奮起を期待すると結論されました。

講演中の依田氏

第4回・名古屋大学東京フォーラム開催

今回の東京フォーラムは、名古屋大学と日本経済新聞社による共催で、全学同窓会の後援により、2006年12月12日に経団連会館にて開催されました。平野総長からは、青色発光ダイオードの産学官連携を例として、産業界のニーズに応えるのが大学の使命であるとの挨拶があり、また、結城文部科学省事務次官からは、産学官連携による研究成果を通じて、我国の国際競争力強化に期待するとの挨拶がありました。今回は、「ものつくり中部の未来像」をテーマとして、同窓生2人による基調講演が行われました。

伊藤忠商事㈱会長の丹羽宇一郎氏より、グローバリゼーションが進展する中で我国が成長を続ける為には、人と技術に投資すべきであること、大学は「イノベーションセンター」の役割を担い、海外の科学者・研究者が集まるよう共に努力しよう、というご意見でした。続いてトヨタ自動車㈱の内山田竹志副社長より、トヨタの技術開発の根底の「トデイ・フォー・ツモロー」のフィロソフィーの土台の上に開発ビジョンがあること、理想のモビリティー社会実現の為に、産学官連携によって、ニーズとシーズのマッチングの為に技術交流会を開くこと、そして異分野融合領域への対応策として複数の教授陣との協力を得る共同研究マネージメントの重要性や、医工連携による健康増進システムの開発等を課題として、大学には企業を意識して、共に国際競争力のある日本を築き上げよう、との提言がありました。

午後から経団連ホールでは、研究者による講演会が2件―馬場嘉信教授による「ナノ・バイオ融合技術による予防早期医療創成」國枝秀世教授による「X 線反射望遠鏡を作るナノメータの世界」が行われ、併行して、会館会議室にて説明会が開催されました。また、ホールロビーにおいては、28の研究室のパネル展示説明と、産学官連携相談コーナーももうけられました。その後産学連携交流会も開かれ、盛りだくさんの中身の濃いフォーラムとなりました。

（片岡大造）

基調講演をする丹羽宇一郎伊藤忠商事㈱会長

活躍する会員たち NUAL People in Action

「活躍する会員たち」では、同窓会会員たちの各界における活躍ぶりをご紹介します。第5回目は、教育心理学の立場から愛知県教育委員会委員として活躍されている中部大学教授の梶田正巳さんと、日産化学工業株式会社で農薬の開発に関わってこられた取締役の平田公典さんに寄稿をお願いいたしました。

This column “NUAL People in Action” features our alumni playing active in various fields. In this fifth issue, we have articles contributed by Professor Masami Kajita, who has been working as a member of Aichi Prefectural Board of Education, and by Kiminori Hirata, who has engaged in the development of agricultural chemicals as a director in Nissan Chemical Industries, Ltd.

梶田正巳さん

1963年、教育学部教育心理学科を卒業、松下電器産業株式会社に勤務。1966年から名古屋大学・大学院で教育心理学を学び、教育学博士。大阪市立大学の助手、講師、75年に教育学部助教授、88年より教授、98年から2000年3月まで教育学部長。あわせてイリノイ大学、ハーバード大学エンチン研究所、スタンフォード大学で研究。04年に停年退官。現在、中部大学人文学部教授。この間、文部省教育助成局海外子女教育課の併任専門官、名古屋市社会教育委員、愛知県教育委員等を歴任。主な著書は「異文化に育つ日本の子ども―アメリカの学校文化のなかで」（中公新書）、「勉強力をみがく―エキスパートへのみち」（ちくま新書）、「学校教育の心理学」（名古屋大学出版会）、「学びの教育文化誌」（ナカニシヤ出版）など。

激動期の教育界から

昨年10月10日の閣議決定で、野依良治本学特別教授を座長とする「教育再生会議」が発足、中曽根臨教審以来である。そして12月の教育基本法の改正。普段に接するニュースには、青少年のいじめや自殺、虐待や殺人事件、高校未履修科目問題等…。昨今の教育界は激震に見舞われている。

幸か不幸か、名古屋大学をリタイアし、マイペースで暮らそうとしていた矢先に、愛知県教育委員会の教育委員を拝命することとなった。この教育委員、従来は地元企業のトップ、学校教育から元校長、法曹界の専門家、保護者会の責任者、そして教育長からなっていたのが、教育心理学者にも役目が与えられたのである。

一昨年10月下旬から加わって、一年数ヶ月が過ぎた。6人の委員と教育委員会事務局・各部課長による会議は、教育委員長が司り、通年にすると十数回は開催されている。教育委員会会議の他には、県議会や文教委員会等への出席はむろんのこと、小中高等学校の教育現場も訪問する。先日は、学校の○○周年記念行事に設置者代表としてお邪魔し、高校生諸君に直接話をすることになった。公式の挨拶で、若い人に訴えるにはどんな話がよいか、苦労もしている。

はたまた夏や冬の国民体育大会に選手や役員とともに参加し、国体開会式入場行進もする。その他にも、市町村教育長や小中高校長等との意見交換、全国あるいは地域ブロック毎の協議会、文部科学省関係部局との懇願会、研修会などもある。こうした体験を通じて感じた基本的課題を一つ、二つ書き留めることにしよう。

はじめに学校と教育委員会の関係では、そもそも小中学校の教育は市町村教育委員会の所管事項、高校教育は都道府県教育委員会が専管している。文部科学省の現場は唯一大学院、大学である。ということは、学校教育については、国の役割もあるが、何よりも地域が一番肝心なのである。

すなわち、市町村の教育委員会、都道府県の教育委員会に、身近な問題を速やかに解決する能力はもちろんのこと、次の時代や社会を見通して施策を創造し、企画、運用できる力が備わっていることが前提になる。旧来からの慣習や流れに従っているだけでは、変化の激

指導生たちと

しい現代に即応することは困難だろう。

ということは、地元が自立して必要な施策、活動を次々と生み出す「仕掛け」が、地域にしっかりビルトインされていることではないだろうか。これは単に教育行政機構の中に備わっているということを遥かに越えている。すなわち、近隣の大学をはじめとして、教育関係の機関に求められていることである。長年、中央志向で進んできたわが国の実態を眺めると、関係者には内心忸怩たるものがあるのではないだろうか。

関連して第二に、地域の人々の構え、態度が大きくものを言うと思われる。すなわち、国の施策や世界の教育動向を気にして、“○○では…だ”、“△△は…だ“という「出羽守」的発想を卒業しなければならない。逆に、外はともかく、足元、自分の現実に基づいて、自立的に考える「態勢」が不可欠になる。

トップダウンではない。地域の現実に即して、“ボトムアップ”に教育施策、実践活動を生み出そう、という態度、構えである。地域、地元に軸をしっかり定めて、期待される活動を積極的にしなければならないと思う。

繰り返すようではあるが、世界や国の動きなどを気にして、勉強ばかりするのでは、いつの間にか地域から足が浮いてしまう。実際、地元のことは知らないが、他の動向には非常に詳しい人が少なくない。初等中等教育は、何をおいても、目の前の児童生徒を相手に、実態に即して地に足のついた活動をすることであるが、ボトムアップの忘れられていることがある。

近年、“地方の時代”をよく耳にするが、何はともあれ、上の二つを実質化することではないだろうか。

こうした状況を考えると、第三に地域にある基幹大学の役割、使命は非常に大きいと思われる。外に出ると、あらためて感じることである、名古屋大学には頑張ってほしい…。

端的に言えば、地域の“シンクタンク”として大きな働きを期待している。すなわち、現実にしっかりと足を踏まえながら、日本や世界に視野をすえた活動は、学問の府として最も得意な働きである。地域貢献という最近の言葉もあるが、地元のシンクタンクとして頼られるようになってほしいものである。激動期のこうした時代、社会こそ、名古屋大学の“存在感”を高める絶好のチャンスではないだろうか。関係者の健闘を祈っている。

平田公典さん

1951年8月　名古屋市生まれ
1975年3月　名古屋大学農学部卒業（農学科害虫学講座）
1975年4月　日産化学工業株式会社入社
　　生物化学（現　生物科学）研究所配属
1991年2月～　Nissan Chemical America Corp,
1995年8月　New York 勤務
2006年6月　日産化学工業株式会社
　　取締役　農業化学品事業部副事業部長

■名古屋大学農学部のころ

幸い名古屋大学に入学出来たので、小さいときから好きだった昆虫の研究が出来たらと思い農学部に進学、害虫学講座を専攻しました。　4年生になり私達6名の害虫学専攻生に齋藤哲夫教授、巌　俊一助教授（後に京都大学農学部昆虫学講座教授に転任）、宮田　正助手、寒川一成助手からどんな卒業論文実験をしたいのか、を順次尋ねられました。　翌週私は予てから考えていたテントウムシの生態を研究したいと恐る恐る申しましたら、教授は農学部だから今後のこともあるので現在問題となっているナス科植物の害虫のニジュウヤホシテントウの研究をしてはどうかと言われ賛成しました。

害虫学講座専攻生は修士6、博士3、研究生数名で全学同窓会タイ国支部長の Neungpanich Sinchaisri さんも博士課程におられました。　研究室の車を技官の本多八郎さんが運転して長野県・愛知県の各地を定期的に走り回り、テントウムシとその食草を採集して楽しい卒業研究が出来ました。　ルイヨウボタンに寄生するテントウムシの新発見は昆虫採集の好きな私の喜びでした。

この成果は皇學館大學で1975年1月に行われた日本昆虫学会東海支部第65回例会で平田・巌・本多の連名で「三河山間部におけるマダラテントウ類の分布と長野県大滝村におけるルイヨウボタン寄生オオニジュウヤホシテントウについて」として報告しました。　研究室では毎週外国文献紹介のセミナーと3ヵ月毎の全教官・専攻生による研究報告会が行われ、時に厳しい質問に困惑しました。

海外からの訪問者があるたびに研究室では Welcome Seminar が開催され、来訪者の研究発表に次いで、教官・学生が自分の研究を英語で紹介し、発表者は近くのレストランなどの歓迎コンパが無料で、生まれて始めて日本語の通じない外国人研究者に自分の仕事を英語で説明し、外国人の質問に英語で答えられたときのアルコールの美味しかったことは忘れられません。

卒業試験も終わり教授から卒業後のことについて訊ねられ、大学院に進学せず企業に勤めたいと申しましたところ、教授の推薦もあって日産化学工業株式会社に採用されました。

■日産化学工業株式会社で

会社は1887年（明治20年）の創業以来、常に新たな技術の開発に挑戦し、電子材料を始め各種材料用表面処理剤などの開発「化学品分野」、安全で活性が高く環境への負荷が少ない新農薬創出の研究開発「農業化学品分野」、最新技術を取り入れた新薬創出「医薬品分野」の研究開発が行われています。
私は埼玉県白岡町の生物化学研究所（現在は生物科学研究所）に配属され、農薬の開発研究に携わることになりました。　既に名古屋大学農学部害虫学講座の先輩の林真守（1958年卒）、廣瀬正宣（1964年卒）さんがおられ公私ともたいへんお世話になりました。　研究所の環境は自然が豊かで農場もあり、試験用の昆虫を採集、飼育の工夫をするのは私にとって楽しいことでした。　除草剤を目的として合成されていた一連の化合物について各種の農業害虫に対する効果を調べました。　Pyridazinon 系化合物がハダニ類に対して面白い殺虫活性があることからハダニの試験法の工夫をしな

生物科学研究所

林真守（元常務取締役）さんと右　私

がら更にそれ等の誘導体をもとめ、ハダニに高い活性のある pyridaben が得られました。　しかし、本剤を農薬として使用するには数年の時間と多額の費用がいります。試験研究機関にも委託して、温血動物に対する急性・慢性毒性、催奇形性試験、発ガン性試験、などの毒性試験はもちろん魚類、環境生物への影響、作物への薬害試験、適用作物における残留試験を実施し食品中の安全性、適用する害虫種、作物、安全使用法も明らかにして、これ等の成績資料を総て政府に提出し、政府の審議会で有効性・安全性が確認され、商品としての「サンマイト」が実用にされました。　私は害虫関係者としてハダニの生物試験を担当しましたが、化学合成、化学分析、毒性試験、環境評価、等多くの方々の協同作業による成果であります。　本剤は当社のオリジナル製品で、わが国のみならず外国でも広く登録使用され農家から喜んで戴いていることは開発の苦労を喜びにかえてくれます。　そのほか幾つかの農薬の開発に関係しましたが何時も苦労と喜びの連続です。

1991年 Nissan Chemical America Corp. 勤務となり、New York で北米各地の大学、試験場、企業に当社農業化学品の紹介、販売を担当しました。　日本と異なる感覚で交渉することの戸惑いもありましたが学生時代の Welcome seminar を思い出し、努力しました。1995年に帰国し、しばらく生物科学研究所に勤め、本社に移り、農業化学品事業部に勤めています。現在当社に名古屋大学卒業生が21名勤めております。

■おねがい

2002年10月24日の名古屋大学全学同窓会の発足会がシンポジオンで開催され参加させて戴きました。おかげさまでしばらくぶりに先生がたにおめにかかり昔話などで大変楽しい時を過させて戴きました。　父が理学部化学科に永年おりましたので小さい時から木造二階建ての東山キャンパスの様子を覚えております。　その後農学部学生時代の様子とも比較して現在の高層ビルの連立に驚き、名古屋大学の発展の姿を実感しました。法人化と大学院大学化によりよい発展が期待されることでしょうが、難しい問題もあるやに聞いております。　全学同窓会が卒業生との効果的な交流を持続され、名古屋大学の発展に寄与されることをお願い致します。

この頃の入学試験等はマークシート試験が普通になっていますが、卒業後の職場では正解の示されることはありません。　自ら考えて回答をつくるしかありません。とりわけ、天然資源の乏しいわが国は知的生産の出来る人材が望まれます。　在学中に「考える人」・「創造する人」になって卒業して下さい。

同窓会支援事業 NUAL Support Project

全学同窓会では、全学同窓会の活動理念に沿った名古屋大学の活動（学生活動、就職支援事業、本部・部局による行事・寄附講義等）への支援を目的として、平成16（2004）年度より、公募型の大学支援事業を開始しました。この事業は年2回募集を行い、選考にあたっては選考委員会を組織し、厳正に行っております。平成18年度前期採択事業3件について、担当者より報告いただきました。

NUAL commenced an open invitation type support project from 2004 for Nagoya University activities (including student activities, employment support service, events and lectures) in harmony with the activity principle of the association. This project extends invitations twice a year and the Selection Committee is organized to implement a strict selection of activities. The followings are summaries concerning the three activities selected in the first period of 2006.

留学生と日本人学生が共に学びあい・支えあう国際教育プログラムの開発

Development of International Education Programs on Campus: Creating Mutual Learning and Cooperation Opportunities among International and Japanese students

申請代表者：高木ひとみ（留学生相談室）

名古屋大学留学生相談室と留学生センターは、名古屋大学で学ぶ外国人留学生の生活適応支援、さらに文化の違いを超えた学生間の相互理解、学生が主体的に活動する能力の育成を目的に、新しい発想に基づいた国際教育プログラム「多文化間ディスカッショングループ」「スモールワールド・コーヒーアワー」「ヘルプ・デスク」を展開しています。全学同窓会の支援のもと、各プログラムの活動規模がより全学的に広がることを目指し、学生の力を活かす環境作りを進めています。

1. 多文化間ディスカッショングループ　大学院生ファシリテーターの活用

多文化間ディスカッショングループは、留学生と日本人学生の相互理解を促進することを目的とした継続的なグループ活動です。大学院生のファシリテーターを採用したことで、英語と日本語によるグループ活動を毎学期実施できるようになりました。

2. スモールワールド・コーヒーアワーの開催

スモールワールド・コーヒーアワーでは、ボランティア学生の企画・運営により、留学生や日本人学生が文化交流を通して親睦を深め、学内のネットワークを築いています。2006年度後期には「名古屋を知ろう！」「世界のお正月」「かるた大会」をテーマに3回実施し、のべ約130名が参加しました。

3. ヘルプ・デスク

ヘルプ・デスクは名古屋大学生が主体となって、新入学留学生のためのサポート活動を行っています。留学生活や勉強について先輩学生と気軽に情報交換しながら、楽しい交流の場を提供しています。下記ワークショップとの連携で、活動範囲を全学的に広げることを目指しています。

4. 多文化理解に関するワークショップの実施

2007年度前期に、各プログラムに関わる学生や国際交流に関心のある学生を対象としたワークショップを行う予定です。多文化理解について考え、学生の異文化コミュニケーション力を高める予定です。

5. 報告書の作成

3つの国際教育プログラムの活動を今後に繋げていくための報告書を作成中です。2007年度前期に印刷予定です。

スモールワールド・コーヒーアワーの様子

ヘルプ・デスクのボランティア学生

2004年アチェ地震津波と2006年中部ジャワ地震における学生ボランティア活動の交流

Exchange of student volunteer work on 2004 Sumatra Earthquake Tsunami and 2006 Central Jawa Earthquake

申請代表者：木股文昭
（環境学研究科　地震火山・防災研究センター）

名古屋大学地震火山・防災研究センターでは、インドネシアが日本と同様にプレート沈み込み帯に位置することから、地震と火山活動に関する国際共同研究に取り組んでいる。犠牲者が20万人を越えた2004年スマトラ地震津波では、最大の被災地バンダアチェで本学の社会学の研究者と連携し、インドネシアの研究者とも協力して地震津波の発生過程から災害からの復旧と復興の過程について調査研究を進めている。このなかで、私たちは激甚な災害経験を生かすには現地の研究者のみならず学生や人々との協力が重要であることを学んだ（「超巨大地震がやってきた」時事通信社）。

私たちはバンダアチェを調査で訪れるたびに、現地のシアクラ大学で学生に地震や津波の講義を行ってきた。地震学の講義を受けたことのない学生ながらも質問など積極的な姿勢に感銘した。インドネシアの学生も2004年スマトラ地震や2006年のジャワ島での2つの地震と津波に際し、災害ボランティアの活動に積極的に取り組んだ。避難キャンプなどで、政府や自治体の管理能力がなくなった下でそのマネージメントの役割を果たした。この意味では日本の学生よりも貴重な経験を積んだことになる。

アチェの人々の努力と世界の人々の温かな目が、大災害を蒙ったアチェに内紛から和平を実現させた。今や、国際協力で歴史が動く時代になっている。大学においても国際協力が教員だけのものだった時代は過ぎ去ろうとしている。今回、インドネシアから一連の地震津波被害で活躍した学生のメンバーを迎え、災害と学生の果たすべき役割などについて貴重な経験を交流したいと考える。それだけに、名古屋大学の学生のみならず留学生も含め、さらに他大学の学生も参加した交流である。

学生のための就職情報等に関する最新図書、視聴覚資料の整備（2）

Supply of Books about Job Information for Students (2)

申請代表者：伊藤義人（附属図書館長）

附属図書館では、平成17年度の第1回名古屋大学全学同窓会大学支援事業の助成により、学生に対する就職支援の一環として、各種の就職試験・資格試験に関する資料、職業案内、面接・ビジネスマナー及びプレゼンテーションの技術などの図書並びに視聴覚資料約150点を購入するとともに、中央図書館3階フロアに「就職コーナー」を設置しました。

「就職コーナー」については、附属図書館の広報誌「館燈」などで広報を行いましたが、同コーナーの資料は、1冊当たり年間平均3回の貸出し、またおよそ1割は10回以上も貸出しがあるという状況で、学生に非常によく利用され、就職活動や資格取得に役立っていることが伺われます。

このたび幸いにも全学同窓会から第2回目の支援を受けることになりましたが、今回は、特に就職活動の支援に重点をおき、とりわけ就職活動の仕方、面接や履歴書・エントリーシートの書き方等を中心として、約300点の関連資料を整備いたしました。引き続き学生の皆さんに、利用していただきたいと考えています。

また、附属図書館では、「就職コーナー」の他にも、就職活動に使えるデータベースの利用ガイダンスなども行っていますが、今後も「就職コーナー」の図書を最新版へ更新するなど更に充実させることにより、学生の就職活動を情報面から強力に支援することが出来ると考えています。

名大図書館就職コーナー書籍

支部・部局便り News from the Alumni Associations of Different Schools and Regions

部局や地域ごとの同窓会から寄せていただいた便りを掲載します。伝統ある同窓会も、新たに設立される同窓会もありますが、それぞれが全学同窓会と連携しながら活動しています。

Here you can find announcements and news from alumni associations of schools and/or regions. These associations and NUAL are cooperating with each other to everyone's benefit.

関東支部 NUAL Kanto Branch

学士会館にて関東支部幹事有志と懇談する総長
（2006.10.13）

関東支部は、学士会館名古屋大学東京連絡所を拠点として毎月1回以上、幹事会などを開催、幹事間と大学関係者との話し合いを行って、名大の活動に協力してまいりました。

〈2006年度の活動〉

①第2回ホームカミングデイへの参加

②第4回東京フォーラム

③名大での講演会開催

1月17日「イノベーション・グロバリゼーション」をテーマに依田直也幹事が講演

〈2007年の計画〉

①東京から見た名大の未来像と具体化

民主導の提言の具体化

②第5回東京フォーラム

③第3回ホームカミングデイ

④名簿の整理によるネットワーク構築

⑤産学連携の推進の具体化

大学関係者の皆様、全学同窓会の皆様の、ご協力ご参加を幹事一同、望んでおります。

名古屋大学遠州会 NUAL Ensyu Branch

名古屋大学遠州会は静岡県西部の名古屋大学全学同窓会として平成8年に発足し、今年で11年目となります。対象の名大卒業生のうち約500人が会員登録し、毎年の懇親会には約80人が出席しております。今年は5月26日（土）を予定して居ります。

前回までやや中高年の男性に偏っている会に、もっと若い会員や女性会員の出席を増やし、より活性化するべく、若い役員を中心に討議した提言を基に、今年は従前と違った企画を検討しております。3月下旬までには詳しいご案内ができると思います。

年一回の全学同窓会に繋がる遠州地域の身近な交流の場であり、世代と学部を超えた交流が活発に出来る場を演出する事を第一にしたいと思います。

近年の市町村合併や浜松市が政令指定都市となることで住所表示が大幅に変わるので名簿も改訂を予定しております。

遠州地区に在住または在勤の名大卒業生の参加をお待ちしております。

参考　H18年出席者は　平均昭和42年卒　62歳

■問合せ先

TEL/FAX：053-425-0991

E-mail：hi-uchi@po3.across.or.jp　　事務局　内山まで

教育学部 Education

ホームカミングデイ「交流の広場」

本会は教育学部とともに50年あまりの歴史を歩み、大学院教育発達科学研究科（旧・教育学研究科）の同窓会を兼ねています。現在の会員数は約2800名となりました。

主な活動としては、年1回の総会開催と「通信」発行などがあります。2006年は名古屋大学ホームカミングデイと同時開催で、9月30日に総会を行い、村上隆 前・研究科長による「名大教育学部の魅力」と題した講演会を主催しました。また、研究科と共催で、中庭を開放して、卒業生、

在校生とその保護者、現・教職員、地域の方が自由に集える「交流の広場」を企画し、懐かしいひとときを過ごしていただきました（写真）。

2007年度は引き続きこれらの行事を開催すると同時に、ホームページの充実を課題としていきたいと考えています。また、2000年に教育学部創設50周年記念事業として「21世紀・人間発達学術研究基金」が設けられ、教育学部同窓会会員の社会的活動や研究活動への支援を行っています。2年に一度、授賞式があり、2007年度が第4回に当たります。会員の方は「通信」に詳細が載っていますので、ご覧の上ぜひ候補者のご推薦をお願いします。

文学部・文学研究科同窓会 Letters

あおぎりの植樹

文学部・文学研究科同窓会では、昨年も、まず3月4日（土）に文学研究科シンポジウム（「文学の競演」）にあわせて、同窓会総会と懇親会を行いました。そして9月30日（土）の全学ホームカミングデイでは協賛行事として前年に引き続き、秋季サロンを開催し、今回はCBCアナウンサーの丹野みどりさんと多田しげおさんに講演をしていただきました。同窓会誌「あおぎり」は昨年1月末に3号を発行し、次の4号もすでに会員のみなさまのお手元に届いているかと思います。

かつてキャンパスが名古屋城跡にあったころ、文学部棟の前に植えられていたあおぎりの木が文学部のシンボルとなっていたとのことですが、文学部創立60周年の前年になる昨年4月末、同窓会では文学研究科棟南側中庭にあおぎり10本を植樹しました。新たな節目を迎えて、文学部・文学研究科と同窓会とがさらに大きく枝葉をひろげて伸びていくことを願います。

文学部の卒業生、修了生の方で、この新しい同窓会活動についてのお知らせが届いていない方がおられましたら、ぜひお知らせください。ホームページでもご案内しています。

■連絡先

〒464-8601

名古屋市千種区不老町名古屋大学大学院文学研究科内

名古屋大学文学部・文学研究科同窓会事務局

TEL：052-789-2226

FAX：052-789-2272

E-mail：bun-doso@lit.nagoya-u.ac.jp

（ホームページ　http://bun-doso.nagoya-u.ac.jp）

法学部 Law

名法会が開催される

10月21日（土）11：00～13：00、CALEフォーラムにて昭和30年卒（第5回）の同窓生を中心とした同期会（名法会）が開催され、約20名の皆様が参加されました。この会は毎年行われているものです。

今回は石田純忠氏の開会の挨拶にて会は始まり、関谷崇夫氏（前法学部同窓会理事長）の音頭にて乾杯を行った後、同期生は思い思いに旧交を温め合われました。

後半では全員が近況や当時の思い出を語られ、和気あいあいの中で会は進行しました。

予定された2時間はあっという間にすぎて、小栗福夫氏の閉会の辞で会を終了しました。今回は同窓生からお借りした当時の校舎の風景の写真や集合写真を会場に掲示したことから、参加者の方々から大変好評を頂きました。

農学部同窓会（セコイア会） Agriculture（Sequoia-kai）

名古屋大学
農学部同窓会
セコイア会

農学部第3回卒業生（昭和32年3月卒業）のみなさんが、平成19年3月に卒業50周年を迎えられます。これを記念して平成19年6月2日（土）に、農学部談話会にもご協力いただいて、第3回卒業50周年記念祝賀会を開催するため準備を進めています。懐かしい先生方にもご参加頂

けるかと思いますので、記念祝賀会へのご招待状が届きましたら、万障お繰り合わせの上、ご出席ください。第1回および第2回卒業50周年記念祝賀会の様子につきましては、農学部同窓会ホームページ（www.agr.nagoya-u.ac.jp/~dosokai/）をご覧下さい。来年は第4回卒業生をお招きする予定です。

同日には、農学部同窓会総会、講演会、および懇親会を開催いたします。講演会のみ、懇親会のみでもかまいませんので、お誘い合わせの上、ご参加下さい。

また、前号にて名古屋大学農学部跡地（現在は安城市総合運動公園）への記念碑建設の計画が進められているとご紹介いたしましたが、安城市ならびに農学部卒業生、現・旧教職員の多大なご支援のもとに完成し、平成18年11月11日（土）に100名を超す参加者とともに除幕式を開催することができました。この様子につきましても、同上のホームページに詳しく掲載しておりますので、是非ごらんになり、またお近くへお越しの際はお立ち寄りいただければと思います。

工学部・工学研究科 Engineering

従来、工学部・工学研究科同窓会では、4年ごとの卒業生名簿の発行を主な事業として活動してまいりました。しかし、傘下の各学科専攻同窓会会員を合わせると数万人の規模となる会員数は、「個人情報保護法」の対象団体となるにもかかわらず、現在の体制では、工学部・工学研究科卒業生・修了生皆様の個人情報の行き届いた管理は望めません。このため、昨年7月の評議員会におきまして、会則改正を実施し、工学部・工学研究科同窓会を、現状に合わせて、各学科専攻同窓会の連合体組織とすることとなりました。また、会員名簿の発行の廃止のみならず、各学科専攻同窓会会員の個人情報は保有しないことにいたしましたので、これからは、卒業生・修了生の皆様には、各学科専攻同窓会を通して参加していただくことになります。今後も、引き続き卒業生・修了生の親睦と名大工学部・工学研究科の発展に寄与するような活動を展開していきますので、ご理解とご協力をお願いいたします。

大学ニュース　Nagoya University News

■「第1回アジア最先端有機化学国際会議」が開催される

名古屋メダル特別賞を記念して、
チュラポーン王女殿下（右から2番目）を囲む

「第1回アジア最先端有機化学国際会議」が、平成18年10月16日（月）から20日（金）までの5日間にわたり、沖縄県において開催されました。

本会議は、本学が日本学術振興会より採択された「アジア研究教育拠点事業」の課題「アジアの最先端有機化学」の一環として開催されたものです。同課題は、我が国とアジア諸国の研究教育拠点機関を繋ぐ持続的な協力関係を確立することにより世界的水準の研究拠点を構築し、次世代の中核を担う若手研究者を養成することを目的に、平成17～21年度までの4年半の計画で本学を拠点校とし、アジアの5カ国・地域（日本、中国、韓国、タイ、台湾）に拠点校・協力校を置き、日本国内80名、国内外総計160名のアジア地域の最先端有機化学研究者をコア・メンバーとして組織されたものです。

今回、沖縄で行われた本会議は、アジア研究教育拠点事業において実施された今年度最大の行事で、アジアのみならず世界の有機化学における記念すべき第1回目の国際会議でもあったため、日本の大学及び研究機関から68名、外国から80名、日本企業から14名、総計162名の著名な最先端の研究者が沖縄に集まりました。

本会議では、タイ王国チュラポーン王女殿下（マヒドン大学教授、ジュラポン研究所所長）や、ノーベル化学賞受賞者である李　遠哲教授（前台湾中央研究院院長）、野依良治本学特別教授（理化学研究所理事長）の基調講演が行われました。王女殿下には、16日（月）の開会式で、野依特別教授より「名古屋メダル特別賞」が授与されました。（名大トピックスNo.163より）

■赤﨑記念研究館竣工記念式典及び祝賀会を挙行

赤﨑記念研究館

赤﨑記念研究館竣工記念式典が、平成18年10月20日（金）、IB 電子情報館大講義室及び赤﨑記念研究館において、挙行されました。

同研究館は、高輝度青色発光ダイオードを世界に先駆けて実現した赤﨑 勇本学特別教授の研究業績を称えるとともに、学術創生の重要性を後世に伝え、本学における独創的かつ先進的な科学技術研究を推進する目的で建設されたものです。

竣工記念式典には、林 幸秀文部科学審議官、沖村憲樹独立行政法人科学技術振興機構（JST）理事長、松原彰雄豊田合成株式会社取締役会長、堀篭登喜雄同相談役、ボゥ モネマー スウェーデン・リンショッピン大学教授等が来賓として出席し、学内からの出席者を併せて約150名が出席しました。

式典冒頭で、平野総長が「赤﨑記念研究館と隣接するベンチャー・ビジネス・ラボラトリー、インキュベーション施設を中心とし、『産学官連携ゾーン』として位置付け、一体的・有機的に機能させることにより、産業界などとの連携をより一層深め、本学だけでなく、中部地区の産学官連携の拠点としていきたい」との考えを示しました。

同研究館は、地上6階建てで、1階には、装置開発ファクトリー及び赤﨑特別教授の研究業績と青色発光ダイオードの研究開発史を紹介した展示室があり、豊田合成株式会社より寄贈された160インチディスプレーが設置されています。2階には、産学官連携推進本部、知的財産部、社会連携課からなる産学官連携推進室、3～5階には、次世代の技術開発・研究開発のための研究実験室等のレンタルラボ、6階には、赤﨑特別教授室があります。

（名大トピックス No.162より）

■「ファミリーマート名古屋大学店」オープンセレモニーが挙行される

テープカットの様子

平成18年7月24日（月）、東山地区全学教育棟前において、株式会社ファミリーマートによるコンビニエンスストアのオープンセレモニーが挙行されました。

同店のオープンにあたっては、旧文科系自動車車庫のスペースを学生、教職員の福利厚生施設として有効利用し、民間の力を借りてコンビニエンスストア等の新規事業を展開することについて、学内に広く意見を求めた結果、コンビニエンスストアの設置が決定し、同運営事業者を公募して、厳正に審査をしたところ、株式会社ファミリーマートが同運営事業者として選定されました。

店内は、プレゼンテーションや発表などに適したスクリーン等を備えた多目的に利用できるマルチスタディルームや、5台のパソコンが設置されたイートインコーナーが配備されており、学習の場及び、憩いの場としての利用が可能です。また、弁当、飲料、日用品、雑誌などのコンビニエンスストア商品や、各種公共料金の代行サービス、マルチメディア端末によるチケット販売、銀行 ATM など各種サービスが得られます。

（名大トピックス No.160より）

大相撲力士　舛名大活躍

全国的な話題となった「3人目の国立大学出身大相撲力士」舛名大（田中周一君：工学部化学・生物工学科応用化学コース4年）。初場所デビューで、堂々、序の口優勝決定戦に出場しました。惜しくも敗れてしまいましたが、6勝1敗の好成績で躍進が期待されます。全学同窓会広報委員会では、卒業実験の大詰めで忙しい田中君にインタビューをお願いしました。

Masumeidai Shuichi (Mr. Tanaka Shuichi, a senior student in School of Engineering) is now very famous and popular in Japan as the third sumo wrestler graduated from national universities. He recently debuted at the jonokuchi class of the grand sumo tournament with a 6 and 1 performance.

広報　初場所のご活躍おめでとうございます。大相撲デビューの場所の感想はいかがでしたか。

田中　東京と名古屋を行ったりきたりしていたわりには単純によかったです。普通、序ノ口では最初に1敗してしまうと優勝なんて無理なんですが、優勝決定戦まで残れて、運がよかったのかもしれません。でも、「運も実力のうち」と思っていきたいと思います。

広報　優勝決定戦ではどうでしたか。

田中　こんなに早くテレビに映ることができてうれしかったです。相撲をとる時間帯も違うし、場内の明るさやお客さんの数に圧倒されて舞い上がってしまい、全く、動けませんでした。

広報　相撲を始めたきっかけは、よく報道されていますが、学内の相撲大会だとか。

田中　相撲部は毎年2回、学内で素人相撲大会を開いているんですが、1年生のとき名大祭実行委員をしていて、名大祭のプレ企画として開催された相撲大会に出場したんです。この大会は3人一組の団体戦で友人2人と出場しました。予選リーグと決勝リーグがあって予選リーグでは負けてばっかりいたんです。チームは残りの2人ががんばって決勝リーグに進出できたんですが、相撲部の師範の先生の助言をもらったら、勝てるようになってその大会に優勝したんです。相撲は体が大きいだけじゃだめなんだ。奥が深いと思いました。でも実際に相撲部に入部したのは、まだその2ヵ月後なんですよ。

広報　相撲部ではずいぶん活躍されているそうですね。

田中　インカレでは普通、国立大学は3部4部クラスなんですが、団体戦で3部準優勝したこともあり、2部に上がったこともあります。国公立大学大会では去年・今年と連覇しています。

広報　大相撲に勧誘を受けたときの感想は。

田中　実は、2年生の頃から勧誘されていて、初めは冗談だと思っていました。本気で考え始めたのは4年生になって卒業を考えてからですね。

広報　相撲部屋の生活はどうですか。

田中　年齢や学歴なんか関係ない世界ですから。部屋には16歳の兄弟子もいて敬語で話しています。ただ、体育会育ちなのでそういう上下の関係には違和感は無いです。

広報　まあ、大学の研究室も上に多くの大学院生なんかがいて理不尽なことも多いですしね。得意手や目標にする力士を教えてください。

田中　得意は右差の寄りという正攻法です。目標にしているのは郷土の大先輩の琴光喜関です。

広報　今後の目標は。

田中　1年で三段目まで昇進し、最終的には関取になることです。

広報　大学での勉強は何か役立ちそうですか。

田中　論理的な思考の組み立て方はどんなところでも役に立つだろうって思います。

広報　最後に、後輩に一言あれば。

田中　人生は一度しかないし、まだまだ若いし、やりたいことをやりましょう。

広報　学科の先輩でもある平野総長も大いに期待しています。がんばってください。どうもありがとうございました。

卒業実験に励む田中君

事務局からのお知らせ　From the NUAL Office

●支援会費のお願い　Call for contributions

名古屋大学全学同窓会の活動は、皆様からの支援会費、寄附金に支えられております。支援会費は年度ごとのお支払いとなります。皆様のご協力をお願いします。

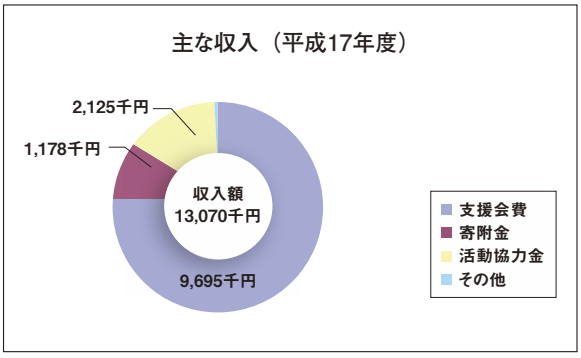
○支援会費　Supporting Fee

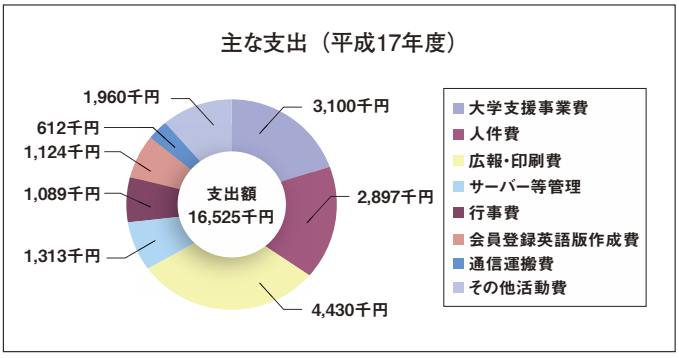
支　援　会　員 Supporting member　：一口　5,000円
支援法人会員 Supporting institution：一口　50,000円

○支払い方法

郵便振替 Post Office Account　口座番号：00860－8－113043
自動引落　利用ご希望の方に、預金口座振替依頼書をお送りします。関係書類をご入用の場合は、同窓会事務局にご連絡ください。

支援会費、活動協力金等は、全学同窓会の設立理念に合致する活動に使わせていただきました。





●入会およびインターネット会員登録について　NUAL member registration

名古屋大学全学同窓会への入会および同窓会名簿への登録についてご案内します。
You can register your membership and renew your data through the following web-page.

○新卒業生・修了生

会則に従い、自動的に名古屋大学全学同窓会の会員としてお名前、生年月日、卒業年が名簿に登録されます。同窓会ホームページには、本人だけがアクセスできる現住所、電話、E-mail、勤務先等々の欄がありますので、ご自身での記載変更をお願いいたします。

○未登録同窓生・元職員

在学・在職年度や部局等によっては現時点で、名簿に登録されていない場合があります。ホームページを通して新規登録をお願いいたします。

※名簿は社会貢献人材バンクとして全学同窓会および名古屋大学の活動に利用しますが、個人情報は本人の承諾なしに公表されることはありません。最新の会員情報が得られますよう、皆様のご協力をお願いいたします。

ホームページ　http://www.nual.nagoya-u.ac.jp

●同窓会ラウンジのご利用について

名古屋大学内広報プラザ2階に同窓会ラウンジがあります。ご友人との待ち合わせ場所、大学訪問の拠点などにお気軽にご利用ください。（利用時間：平日の午前9時から午後5時まで）

編集後記

本号は第2回ホームカミングデイを特集しました。今後も毎年恒例行事として開催されます。多くの方々の参加を期待します。全学同窓会の特徴的な事業である名古屋大学の諸活動への支援について、その成果の報告を掲載しました。また、母校への間接的な支援となる同窓会カードについての記事もぜひご覧ください。いわゆる固い内容が続く中で、大相撲力士、舛名大の誕生の記事はとても異色です。これからも皆さんからの情報をお待ちします。

（全学同窓会広報委員会）

NUAL Newsletter　No.8　平成 19（2007）年 3 月発行
Nagoya University Alumni Association
NUAL 名古屋大学全学同窓会

〒464-8601 名古屋市千種区不老町　TEL/FAX 052-783-1920
E-mail nual-jimu@post.jimu.nagoya-u.ac.jp
ホームページ　http://www.nual.nagoya-u.ac.jp/

編集：名古屋大学全学同窓会広報委員会